

第3回 コミュニケーション能力研究会  
「韓国における韓国語教育について－学習項目グループ韓国調査報告－」  
福永由佳・笠井淳子（国立国語研究所）

2006年9月29日（金） 13:00～16:00

【要 録】

1. はじめに

1.1. 「学習項目グループ」について（福永）

学習項目グループの目標は大きく2つあります。ひとつは、コミュニケーション能力の枠組みと構成要素を同定すること（目的1）、もうひとつは、それをもとに学習項目一覧と段階別目標基準を最終的には作成し、それを基盤資料として、現場の方々や政策のために提供する（目的2）ことです。

目的（1）と（2）を達成するために、具体的に行なうこととして、コミュニケーション能力に関する専攻研究の分析、海外の移民に対する言語政策と教育の実態の情報収集・分析、そして日本語コミュニケーション場面のリスト化と分析を平成18年度は進めています。

1.2. 韓国調査の目的・概要（福永）

今回の韓国調査の目的は2つあります。ひとつは先ほどの「海外の移民に対する言語政策と実態の情報収集」ということに関連する、韓国における外国人移住者に対する言語教育政策と教育の実態に関する情報を収集すること（①）です。もうひとつは、韓国語教育におけるコミュニケーション能力の扱われ方を知ること（②）であり、教育の実態、つまり、どのようなシラバス・教材を作っているか、使っているか、というところから、コミュニケーション能力の扱われ方を探ることです。さらに、これに付随して、第二言語としての韓国語教育の研究の動向を知ること（③）も行ないました。

これらの目的を達成するために、2006年の6月末に、5日間の調査を行ないました。訪問先は、「国立国語院」、「韓国語世界化財団」、「華城外国人保護所」、「延世大学校」、「梨花女子大学校」です。国立国語院と韓国語世界化財団は、先ほどの目的の①にある、外国人移住者に対する言語教育政策を統轄する機関です。華城外国人保護所は入管の施設であり、不法外国人滞在者を帰国までの約2週間滞在させる施設です。そこでも韓国語教育を行なっていて、具体的な実態を知るための授業見学ができました。延世大学校と梨花女子大学校では、先ほどの「目的②」に関して、これまで主に大学で行われてきた韓国語教育でのコミュニケーション能力の扱われ方を探ることと、「目的③」の研究の動向を知るために訪問しました。日程の都合上、授業見学は華城外国人保護所のみで、その他各訪問先では、関係者への聞き取り調査、教材・関連資料の閲覧と収集を行ないました。

今回の発表は、国立国語院（以下「国語院」）、韓国語世界化財団（以下「世界化財団」）、華城外国人保護所、大学、一般という順でそれぞれの機関における中心的な課題について述べます。

1.3. 収集資料の詳細（福永）

収集した関連資料には、教材として主な韓国語教科書、付随するワークブックがありま

す。調査報告書も収集できる範囲で収集しました。例えば、外国人子女に関する実態調査、教材分析などがいくつかあります。さらに、韓国語教育研究の論集があります。韓国語世界化財団からは雇用許可制<sup>1</sup>の韓国語能力試験の実物を頂きました。収集した資料のうち、必要なものに関しては、日本語の翻訳もつけました。

#### 1.4. 韓国語教育の全体像（福永）

韓国語教育の全体像について、大きく国内と国外にわけて簡単にお話しします。韓国国外の場合、「在外同胞」、つまり韓国から外国へ移住した人々や、日本の在日韓国人の人たちなどに対する韓国語教育があります。さらに、「EPS-KLT」という雇用許可制のための韓国語能力試験がありますが、それを受験する人たちへの韓国語教育があります。それから、韓国国外の一般の韓国語学習者ですが、この種の学習者は多様で、韓国に留学しようとしている人たち、趣味で勉強する人たち、あるいは以前に韓国国内にいて、母国に戻ってから学習を続けている人たちなどがいます。

韓国国内については、ひとつは、韓国国外で「EPS-KLT」に合格して合法的に入ってきた人たちへの教育があります。もうひとつは、外国人移住女性、つまり、韓国人男性と結婚した外国人の女性、さらに、その子どもです。また、同じ子どもでも、両親が合法的に入ってきた外国人労働者の子どももいますが、就学が義務付けられているか否かなど、外国人移住女性の子どものとは違いがあります。それから、大学などで学ぶ留学生です。あくまで、今日お話しする中身に引きつけて分けているので、これが唯一の分け方ではありませんが、全体像としてはこのような人々が韓国語教育の対象になっています。

なお、第1回目のコミュニケーション能力研究会では、松岡洋子先生（岩手大学）に、韓国語教育、特に地域での実態について非常に詳しく説明をいただきました。それに対し、今回私たちは、あくまでも言語政策にかかわること、つまり、政府関係機関でどのように韓国語教育が行われ、あるいは政策が立てられているかに焦点を置いて進めた調査について報告します。

#### 1.5. 政府関係機関による韓国語教育事業（国内外）（福永）

韓国語教育関連事業を行なう政府関係機関は、先ほどの国語院、世界化財団のほかにもいくつかあります。「国際教育振興院」は在外同胞教育と国際交流を行なっていて、海外の高校生を招く事業などを行っています。「在外同胞財団」は、在外同胞と言われる人たちの教育を行なっています。「韓国教育課程評価院」は韓国語能力試験（「TOPIK」）を扱っています。「国際協力団」は、海外で韓国語を教える「韓国語教育奉仕団」というボランティアや、韓国語が使えるようなIT環境を整えるために海外に行くボランティアを主管しています。「教育部在外同胞教育課」は財団ではなく政府の一機関ですが、これは韓国人と結婚した外国人女性（移住女性）とその子どもに関することを扱っています。「女性家族部家庭政策局」も移住女性と、その未就学の子女のことを扱っています。最後に、「韓国情報文化振興院」の中には、「韓民族情報化支援団」などの支援団があり、詳細はわかりませんが、イン

<sup>1</sup> 韓国において、外国人の非専門職労働者を受け入れるため、2004年から始まった制度。その制度によって入国する外国人労働者に対して、韓国語試験が課される。

ターネット関係の環境を整えるための支援をする活動をしているようです。

このように、様々な機関が様々な事業を行なっていますが、それを管轄する省庁もいくつかに分かれています。「国際教育振興院」、「韓国教育課程評価院」などは教育人的資源部、「国語院」と「世界化財団」は文化観光部、「在外同胞財団」と「国際協力団」は外交通商部にそれぞれ属しています。さらに、「韓国情報文化振興院」は情報通信部、労働者の支援をしているセンターは労働部、移住女性であったら女性家族部というように、いろいろな省庁が、それぞれの対象に支援策を行なっていることが今回の調査でわかりました。

その基にある法律のレベルでは、非母語話者に対する韓国語教育に関して「国語基本法」で定められています。この法律には、「文化観光部長官が5年ごとに国語発展基本法を策定し、実施する」とあります。法律のレベルで、文化観光部長官が行なうということが明確に謳われています。もちろん韓国人母語話者を対象とした事業もありますが、在外同胞や外国人のための韓国語教育に必要な事業を国家が実施するというのを、この国語基本法で明言しているのです。さらに、その事業を実施するにあたって、必要な資料の収集、実態調査も行なうということも国語基本法に明記されています。この法律が策定されたのは2005年で比較的新しいです。もうひとつ関連しているのが「施行令」です。この施行令では韓国語教員資格付与、さらに韓国語教育能力検定試験に関しても、文化観光部が主管するということがはっきり謳われています。

つまり、文化観光部が行なうということなので、実際に必要な研究・調査は国語院が行ない、それをさらに現場でどう行なっていくか、教材作成や実態調査に関しては世界化財団が担当するという図式になっているようです。法令上はそうですが、しかし、実際に行なわれている事業からみると、文化観光部以上に他の省庁が、いろいろな対象に対して、いろいろな動きをしています。求められる能力、教材、教える教員の質もバラバラになりがちですが、関係者によると、世界化財団がその間に立って調整役を務めるようにしているようです。

## 2. 調査内容

### 2.1. 国立国語院（福永）

#### (1) 組織概要

国立国語院（以下「国語院」）には6月27日と29日の2日に分けて訪問しました。2006年の3月にジョンホソン研究員が国語研究所を訪問して、国語院が実施している韓国語教育に関する事業の概要についてご講演くださいました。その後、インターネット等を使って、日本でも情報収集を行いました。私たちが日本で知り得た情報よりも、実に様々な事業をしていることがわかりました。特に、「学習項目グループ」が最終的に作ろうとしている段階別目標基準に近いものを作るために、現在、作業を進めているということでしたので、詳細なお話を聞くため2日に分けて訪問しました。

国語院について、簡単にご説明しますと、設立は1990年で、当初は「国立国語研究院」と呼ばれていました。言語政策関連研究、つまり政策につながるような基礎研究を行なうことが趣旨として謳われています。2004年に「国立国語院」と名称が変わり、それに伴って言語政策にかかわる「総括的な」業務を行なうことになり、事業内容も多少変化しています。90年の段階では研究がメインでしたが、2004年の名称変更で「研究」が取れてしま

い、研究も含めたもう少し広い範囲で言語政策にかかわる事業活動を行なうようになってきました。

実際の業務に関して、国語院の組織（「チーム」）は、国語政策、国語振興、国語情報化、国語実態研究、韓国語普及、広報出版に分かれています。今回、私たちがお話を伺ったのは、この中の韓国語普及チームです。このチームのメンバーは5名（うち1名は留学中で、実質4名）で、今年になって増員されています。

## （2）韓国語普及事業

この韓国語普及チームが担当する韓国語普及事業について、大まかに分類すると次のようになります。メインは韓国語の海外普及で、具体的には、韓国語の専門家の海外派遣や海外の教師の招聘教育などを行なっています。東京の六本木に「韓国文化院」というところがあり、韓国語教師の養成に関して教師研修会を実施しています。そのような場にも、韓国語研究の専門家として国語院の先生方が派遣されています。2つめは韓国語教員の資格制度、3つめは韓国語教育能力試験、4つめは教材の開発です。教材に関しては、最近できたばかりですが、移住女性向けのテレビ語学番組を放送していますし、従来のような学習用の辞書や教材も開発しています。5つめとして、韓国語教育があります。その次の基礎資料の整備は、今まであった研究調査に関わるもので、各種の調査研究を行ない、標準韓国語文法や語彙の選定も行なっています。最後に紹介するのが「標準韓国語教育課程」（以下、「標準教育課程」と呼ぶ）です。これは今回私たちが特に力を入れて聞いた部分ですが、いわゆる標準的な韓国語教育のシラバスを整備するという作業です。これについては、あとで詳しくお話しします。

ただ、スタッフが少ないため、大学の専門家とチームを組んだり、諮問委員として事業への参加をもとめたり、大学の専門家チームに特定の研究を委託することによって対応しているようです。なお、韓国語教育や韓国語教育能力試験に関しては、実施母体は世界化財団です。以上挙げた事業のすべてを国語院が行なっているというよりも、民間の力も借りつつ、傘下にある世界化財団と連携して行なっているというのが実際のようなものでした。

## （3）標準韓国語教育課程

### 1) プロジェクトの概要

「標準韓国語教育課程」（以下、標準教育課程とも）は2004年から始まり2008年に終了するプロジェクトです。趣旨は、国内外の韓国語教育機関や関係者が教育や教材開発の基準として活用できる基盤資料を提供することで、これは私たち学習項目グループがこれから取り組もうとしている学習項目一覧、段階別目標基準作成に発想が非常に近いので、この話を中心に伺ってきました。プロジェクトの実施期間は非常に短く、来年には完成という目標になっているので、実際に限られた人数、限られた期間でどのようにそれを進めていくかを具体的にお話ししていただきました。

### 2) 手法

どのような基盤資料を基に課程を作るのかを担当の研究員に聞いたところ、学習者の言語使用実態調査やニーズ調査を基にする方法があるのは承知しているが、今回は行なわな

かったとのことです。その代わりに基盤資料としたのは国内外の韓国語教科書の分析データで、それを基に標準教育課程を作ろうということでした。その理由として、まず、ニーズ調査や実態調査はデータ収集・分析に非常に時間がかかることがあります。標準教育課程の構築が急がれるので、計算機による量的処理がしやすい韓国語教科書の分析を行なうという決断をしたということでした。ただし、ニーズ調査や実態調査を今後とも全く行なわないわけではなく、いったん教育課程が完成した後、修正を加えていく段階で、ニーズ調査、使用実態調査を行い、結果を反映させた修正を加えたいとのことでした。

### 3) 教科書分析

教科書の分析については、第一次報告書が出ています。報告書によると、分析対象は全部で 20 種 69 冊、国内・国外両方のもので、各大学や各種センターで作った機関用のものと、独学用のものの両方が含まれています。分析方法は計算機による量的分析を採用しています。ただし、量的分析にあたっては、最初に主要な 5 冊の分析をし、方針を決め、それに沿って残りの分析を行なったとのことです。

分析項目は、まず、教育目標で、教材そのものに明記されている目標と、その教材を使っている機関の目標の両方を分析の項目として挙げています。さらに、機関で使っている教育プログラム、想定する学習者集団の特性、想定する使用環境（独習なのか、クラス学習なのか）、基盤とする外国語教授法や学習理論、構成（単元の構成、1 つの課の構成、翻訳の有無、付属教材の有無）、最後に、学習内容も分析の項目に含まれています。この学習内容が最も私たちが聞きたかった項目で、その課のテーマ、状況、機能、行われている練習、四技能、文法、語彙（連語も含む）、発音、文化、ハングルの扱いなどが下位項目として設定されていました。

配布資料の「機関別教材の外的特徴比較」をご覧ください。この資料は、教科書分析の結果について記載されている第一次報告書からの抜粋です。左端の欄は教材名を記号で示しています。例えば、「K\_G\_IE\_1L\_L01-6」は、国際教育振興院の教材で、「IN」は機関用教材であることを表します。言語環境の欄にある「KSL」というのは、この教材が第二言語（Korean as a Second Language）の学習のために使われていることを表します。教育目的の欄にある「G.C.A.」は、「G」が一般的な意思疎通、「C」が韓国語文化の理解、「A」が学問的目的を示します。この表からは、この教材の想定する学習集団は在外同胞、想定する学習者層は成人で、教授法は GT (Grammar-Translation) と AL(Audio-Lingual)であることがわかります。教授要目とはシラバスの種類のことで、「ST(?)」というの、「おそらく ST であろう」という意味でしょう。「ST」は Structured Syllabus を示す記号で、文法は演繹的な提示をするとあります。文法項目の選定・配列基準は明示されていません。

特に、それぞれの教科書が掲げる教育目標をどのように調べたかを担当する研究員に聞いたところ、教材の「はじめに」のところに明示してある場合は明記してあることを取り上げたが、書いていない場合はその教材を作成した教育機関に直接電話をかけて聞いたとのことです。つまり、教材だけでわかること以外の情報も盛り込まれているということです。教授法や教授要目などは、教科書に明記されているものも当然ありますが、教材分析をする中で分析者が判断して加えた情報や関係者へのインタビューで得られた情報も混ざっています。これを見てお気づきだと思いますが、「学習内容」の項目に含まれているはず

の「機能」、「状況」、「テーマ」についての情報が、この表には盛り込まれていません。当初、分析項目としては挙げていたのですが、作業が進むにつれて、テーマ、状況、機能は分析が非常に難しく、それをさらに整えてこのような資料にすることが今の段階ではできていないそうです。そのため、今回の第一次報告書には結果が記載されていないとのことでした。機能、状況、テーマが非常に重要だということは、もちろん担当者も認識しており、外国語教授法に関する文献を含め先行研究をかなり精査したが、やはり実際分析を開始するとかなり迷いが出ているとのことでした。日本の国語研究所で同様の調査を行なうなら、これらの項目の分析の扱いを逆に聞きたいくらいだという話もできました。「機能」「状況」などの分析結果を今後期待したいと思います。

#### 4) 教科書分析の結果

文法・語彙のレベルについては、初級と中級のレベル分けが教科書によって全く違うことが明らかになったそうです。特に語彙のばらつきが大きく、中上級にいくほど、ばらつきが見られるので、やはり標準教育課程は必要だと考えているようです。

先ほど述べたことですが、「機能」、「状況」、「テーマ（主題）」、「技能」については、客観的な判断基準を作り上げることが難しいため、どう分析していくかについては、もう少し時間が必要とのことでした。また、教育目標が明記されていない教科書があり、機関に聞いても「そういうことは考えていない」と答えるところがあって、これも問題だとのことでした。

#### 5) 標準韓国語教育課程の構築に向けた今後の作業

教材分析により、十分でない部分もあるにしろ、基盤資料はできました。そこから、韓国語教育課程を作るまでどうするかについてですが、実は分析までは国語院で行い、実際に課程を作るところからの作業は韓国語教育の現場を知る世界化財団で行なうようです。具体的には、教材分析の項目、特に学習内容として、例えば、機能、状況、教授法などを整えてレベルの調整をする、さらに、例えば、この状況や主題とこの教授法の組み合わせはどうか、あるいは、この主題だったらこの文法項目が良いなど、項目組み合わせを作りたいと言っていました。もちろん、まだ分析の途中なので、その先のことははっきり言うにいくでしょうが、それを組み合わせて、マトリックスの形で作っていきたいということでした。それは世界化財団が行なうのですが、韓国語教育の専門家を招いて諮問委員会を作り、委員会から出される意見を参考にしながら作り上げると考えているようです。

ただ、もちろん課題もあります。一番大きな課題は標準韓国語教育課程に対し強い反発があることのようにです。特に学会からの反発があります。その理由のひとつは、学習目的は非常に多様になってきているのに、標準化しても多様化に対応できないのではないかという疑問、もうひとつは、それを作って本当に教育効果が上がるのかという疑問です。反発があることは担当者もわかっており、標準教育課程についての理解不足も原因だと言っていました。つまり、標準教育課程をすぐ現場に持ち込むのではなく、それを基にそれぞれの現場で対象や状況に合わせて組み直しをしたり、必要な部分だけ取ったりする作業が必要です。つまり、標準教育課程とは、あくまで参考にしてもらうようなレベルであって、それですぐに教科書ができるわけではありません。その点について誤解があり、反発を招

いているのではないかとのことでした。

## 6) 所感

韓国語能力試験「TOPIK」の基準作成は、教育人的資源部の下にある「韓国教育課程評価院」という部署が行なっています。TOPIK というのは、労働者や子どもなどに対象を限っているのではなく、一般的な韓国語教育が必要な人を想定しており、日本語能力試験のような試験です。韓国で勉強している外国人は皆、意識する試験だそうです。内部資料として公開はされていませんが、この試験の基準は既にあり、改定もされており、級別になっているそうです。この「TOPIK」の基準と、国語院の作る標準教育課程の棲み分けがどうなるのかが気になるところです。もちろん、TOPIK は試験の基準なので、もう少し教育全般のことを考えた標準教育課程とは当然棲み分けがあるはずですが、それが役割分担できるかが未知数であると感じました。実際できるものがどういうものなのかと関連していますが、試験の基準と標準教育課程がどのような関係となるのか、学習者や教育関係者にどのように見なされるのかについては、私たちのプロジェクトも直面する可能性のある問題だと考えています。

以上が国語院における標準教育課程についての報告です。第 1 次報告書も実物がありますから、教材分析について、もう少し詳しいことを知りたい人はご覧ください。

## 2.2. 韓国語世界化財団（福永）

### (1) 概要

この組織は、いわば国語院傘下の韓国語教育の実行部隊であり、現場に近い組織です。設立は 2001 年で、主な目的は韓国語の海外普及、韓国語教育と関連する事業（試験や資格）の主管、韓国語教育のための研究・政策提案です。政策提案のために、関係者を招いたシンポジウムなども行なっており、政策に結びつけるためのさまざまな活動を行なっているということがインタビューの中で強調されていました。研究・政策提案を遂行するために、韓国語教育、評価、文化コンテンツ、普及／支援の 4 つの部門が設置されています。

事業については、国語院同様、さまざまな事業があり、国語院との重なりもあります。それを大まかに分類すると、次の 6 つになります。1 つは韓国語教育のための基盤整備で、基礎文型・語彙の選定、基礎的な調査・選定です。つまり、研究も行なっているのです。第 2 に、教材・辞典・教師用参考書の開発があります。第 3 が韓国語教育ですが、教育そのものというよりは教育を行なう人たちの支援であり、対象としては外国人労働者と移住女性の子供とことです。4 つめに教師教育・資格認証、5 つめに雇用許可制のための韓国語能力試験、最後に、普及のためのネットワークの構築があります。今回の調査で私たちが特に注目して伺ったのが、韓国語教育全般と雇用許可制のための能力試験です。

### (2) 韓国語教育関連授業の概要

韓国語教育について、実際に今行なっているのは、市民団体の行なっている韓国語教室の支援です。参考書の提供、活動の手引きなどの作成・提供を行なっています。さらに、いろいろな先生が作成したシラバスを集めて、シラバスの蓄積もしています。また、市民団体に教えるボランティア教師の研修（60 時間）、教師用の手引きの作成、外国人労働者対

象の韓国語教育の実態調査とニーズ調査を行なっています。調査は、アンケートとインタビューをしていて、実際支援するにあたって、どういうことが問題なのか知るため実態調査をしているとのこと。それから、移住女性のための教科書の開発があります。すでに女性家族部で作った教科書があるのですが、それは少し難しいので、もう少しレベルを下げたものを今作っているということです。もうひとつは、外国人労働者向けの教科書の開発で、すでに『Basic Korean』という教科書がありますが、それは外国人労働者向けの教室では使いづらいということなので、もう少しレベルを下げたものを作っているそうです。

実際どこまで世界化財団の支援範囲であると考えているのか聞いたところ、外国人労働者に関しては、基礎より少し下のサバイバルまでを、移住女性に関しては、外国人労働者よりももう少し上、つまり子どもが就学するにあたって、それに対応できるようなレベル、つまりサバイバルより少し上のレベルを考えているとのこと。移住女性の子女については、まだ検討中とのことでした。

### (3) 外国人労働者向けの教科書開発

先ほど説明しましたように、外国人労働者向けはサバイバル韓国語までをケアしたいというのが方針であり、教科書で扱うのもあくまでもサバイバルのための韓国語とのことでした。この教科書を作るにあたっては、韓国語教育専門家、教師、それから雇用主も入れて検討を行ない、基本文型は 10、語彙は約 300 を既存の基礎語彙・必修文型から選定したとのこと。語彙の量としては、すでに作った初級韓国語『Basic Korean』の約半分に設定しています。

ただし、サバイバルと言っても、やはり文法は大事であるという発言が聞かれました。外国人労働者は意味がわかってコミュニケーションができて、「私、社長、会う」のような文法的に正しいとはいえない文しか作れないのは、社会人として受け入れがたいので、きちんとした文法的な文が作れることを大事にしたいとのことでした。また、ハングルも重視し、少しでも上のレベルにいく場合には、ハングルができないと難しいので、ハングルも取り入れているようです。

場面、機能の扱いに関しては、場面は当然ながら、会社、作業など、労働者が遭遇しやすい場面を想定し、機能に関しては、わからないことを聞き返す発話なども組み込まれています。それに加えて、生活文化的な情報、例えば、会社の寮での生活、トイレや洗濯機の使い方などを盛りこんだそうです。これは雇用主や教師が必要性を訴えた結果だそうです。

### (4) 雇用許可制のための韓国語能力試験(「EPS-KLT」)

次に、雇用許可制のための韓国語能力試験「EPS-KLT」について述べます。これは世界化財団が主管し 2005 年から行なっています。合法的に労働者に来てもらうための韓国語能力試験なのですが、これは労働部の意向に基づいて作成したとのこと。年 3 回実施する予定ですが、ニーズによって回数は変わるようです。インタビューでは、実施後の結果分析はしていないと言っていました。していないのか、結果を公表できないのか、実際がどうなのかはわかりませんでした。担当者としては、結果分析は必要だが、求められて



いないので、今のところはしていないという話でした。そのため、受験者数や合格率について回答が得られなかったのも、どうなのかわかりません。

この試験の作成に関しては、世界化財団も人数は少なく、外部の人も入れて作業をしているようです。そのためか、作成のための基盤資料を得るために、実態調査は実施しなかった、つまり、言語資料調査やニーズ調査は実施されていません。その代わり、試験に関する先行研究を参考にして、どういうテキストタイプにするかを決定したそうです。また、既存の基礎語彙調査は参考にしたということです。世界化財団は文化観光部の管轄ですが、この試験に関しては労働部の意向が非常に大きかったとのこと。そのため、労働部の意向によって、労働関係、例えば、安全に関することや、指示が何かというような労働場面の問題が 2 割出題されました。カテゴリーも、会社の生活、現場の安全という労働関係を入れるように指示があったそうです。労働関係の 2 割を除いた残り 8 割は、世界化財団の自由裁量で作成します。テスト時間や問題数は労働部と調整したとのこと。テストの問題は、機能や場面という概念で作ったわけではないので、そういう概念での分類はできないとのことでした。作成担当者としては、基本的な韓国語の勉強をすれば 60 点は取れて合格すると考えているようでした。ただ、結果分析をしていないので、実際のところはわかりません。

配布資料の中に、第 3 回 EPS-KLT の試験問題を載せてあります。タガログ語の母語話者向けで、所々タガログ語が書いてありますが、多くがハングルなので、やはりハングルが読めないとできない問題がかなりある印象を受けます。実際に試験問題を解いてみた笠井から、詳しく説明をしてもらいます。

## ■ EPS-KLT の実際（笠井）

聴解と読解が 25 問、100 点満点で、聴解は 40 分です。問題用紙をご覧いただければわかると思いますが、聴解の問題でもやはりハングルがわからないと厳しい問題が多くありました。聴解の内容は、ほとんどすべて会話のやりとりの内容を聞いて答えるものです。例えば日本語の試験では、放送などを題材として使ったりしますが、そういうものは一切ありませんでした。40 分の長さは適当であると感じました。テンポは非常にゆっくりで、会社や工場で起こる実際の場面に関わる会話が入っていました。なお、今回の試験は 25 問中 6 問が職場に関係するものでした。

実際に、年 3 回の実施では、いろいろな問題のパターンを作らなければいけないと思いますが、どのようにパターンを作っていくのか難しいのではないかという印象を受けました。似たような問題ばかりになってしまうのではないかと思いました。

読解の問題は、ハングルが読めないと解けない問題ばかりです。選択肢にはハングルに受験者の母語訳がついてあるものがあります。掲示を読んでそれに答える、名刺から読み取る、会社での案内を題材に問いに答えるという試験になっていました。

## 2.3. 華城外国人保護所（笠井）

### (1) 施設概要

ここまでの話は言語政策や、国で実施しているプロジェクトの紹介でしたが、次に実際に韓国語が教えられている現場を紹介します。今回の訪問では、実際に韓国語が教えられ

ている現場も一か所だけ訪問できました。華城外国人保護所です。

韓国語が教えられている状況は、以前松岡先生がお話くださったので（本研究会の第1回）、今回は入国管理局の外国人収容施設、つまり強制送還になる数日前の人たちが収容されている施設で行われている韓国語教育はどうなっているのか報告します。

ここを訪問したのは、ちょうど出張中に授業をしているのがここだけだったこともありますが、大変貴重な経験になりました。

華城外国人保護所は、強制退去させられる外国人の保護管理施設です。強制送還されるまで通常2週間この施設に滞在しています。保護できる外国人の規模は一度に700名、職員は94名です。セキュリティが厳しく、インタビューや授業の様子を写真に撮りたかったのですが、施設の写真は一切許可されませんでした。訪問者は名前のカードを首にぶら下げてから、職員の誘導で扉を開けて施設に入っていきます。収容者たちは柵の向こう側にいます。「留置場」と言ったら失礼ですが、普通の部屋ではなく、柵で区切られた場所にいます。そこには洗濯室や面会室、いろいろな言語の本が置かれた図書室もありました。

## (2) 韓国語教育

この施設における韓国語教育は「保護外国人とともに『国境なき幸せな村作り運動』の一環として行われています。この運動の目的は、収容された外国人の余暇活動を多様化することで情緒の安定を図ることと、伝統文化に触れることで韓国に親近感を持たせることの2つです。具体的には、テコンドー、サムルノリという音楽、ヨガ、カウンセリング、韓国の料理や観光地に関するビデオの上映を行なっています。そのひとつに韓国語教育も組み込まれています。

韓国語教育の目的は、第一に収容者の韓国に対するイメージの向上です。韓国にあまり良いイメージを持っていない収容者が多いので、韓国に対するイメージを少しでも向上してほしいという思いで行なっているとのことでした。もうひとつは、短い期間ではありますが、韓国語能力を身につけることで、自信を持って国に帰ってほしいということです。

韓国語教育の実施に至った経緯ですが、華城外国人保護所の現所長が韓国語世界化財団に講師派遣の依頼をして、2006年5月1日から講師が派遣されています。いろいろな保護施設の中で、韓国語教育が行われているのは、韓国でも唯一ここだけだそうです。

## (3) 韓国語教育の実際

実際の韓国語教育の実施状況ですが、対象は女性の希望者のみです。理由は、男性の場合は講師に危害を与える場合があるためです。韓国語のレベルは多様です。朝鮮族の人たちもいるので、非常に流暢で、勉強する必要がない人もいます。授業時間は2週間の滞在中、最長で4時間、内容は書くこと、読むことが中心です。教材は『移住女性のための韓国語』をもとにしたオリジナルプリント教材で、教科書自体は無償で配られます。授業形態はグループ学習です。

6月26日に授業を見学しましたが、その日の様子を少し紹介します。2つのグループで授業が行われていて、ひとつのグループが10人程度でした。教師はふたりで、韓国国際協力財団(KOICA、日本のJICAに相当)から以前ベトナムに派遣されていた女性と、大学

院生の女性でした。グループごとに教師が一人ずつついて韓国語の授業をしていました。授業の内容ですが、1つめのグループはハングルの読み方と発音、2つめのグループは「名詞+です」の文型を教えていました。韓国語の場合は、子音か母音かで後ろにくる「です」の形が違うので、それを絵カードを使いながら教えていました。それから、自己紹介の言い方を媒介語を一切使わない直接法で指導していました。絵カード、プリントを使つての授業でした。教師は熱心で、「皆さん、帰ったあとも韓国語を使う機会があるので、ぜひ覚えていきましょう」と雰囲気盛り上げていました。受講者の中には一生懸命、韓国語の学習を続けたくて、「もう少し勉強したいのだけど」「先生、来週も来ますか？」とわざわざ聞いてくる学生もいるそうです。今後もこの授業は継続していくとのことでした。

ここでの韓国語の授業は、目的のひとつに韓国語を身につけることで自信を持つてほしいということがあるので、その「自信」を何らかの形にするため、授業の受講証明書の発行を現在検討中だそうです。

今後ですが、女性の収容者は現在使用している『移住女性のための韓国語』の教材の内容が、今の学習者のレベルと合わないの、新たに開発中とのことでした。男性は教師に危害を与えるおそれがあるという理由で、教師による授業の対象になっていませんが、言語院で作成中のビデオ教材を利用して韓国語の勉強の機会が与えられるようになるとのことでした。

## 2.4. 大学における韓国語教育（笠井）

### (1) 概要

次に、大学における韓国語教育について紹介します。本当は授業も見学したいと思ったのですが、訪問時期が韓国で夏休みが始まる時期で、残念ながら大学での授業は見られませんでした。延世大学校の語学堂の先生 2 名と梨花女子大学校の先生にお話を聞くことができました。

調査では、延世大学校校と梨花女子大学校の 2 つの機関を訪問しました。

まず、具体的にどのような韓国語教育をしているのかについて、延世大学校を中心に話をします。

先ほど、福永から韓国語教育の全体像の話がありましたが、今から話すのは、韓国国内の留学生に対する韓国語教育です。

### (2) 延世大学校 韓国語学堂

延世大学校の韓国語学堂（以下、語学堂）は 1959 年に設立されました。1 学期が約 3 か月間、学習者は毎学期 60 か国から来た 1500 人が在籍しています。学習者数の累計は 124 か国 6 万人で、マンモス校です。海外では延世大学校の学校名よりも、語学堂のほうが有名くらいだそうです。教師は 100 人（非常勤講師を含む）です。

韓国語課程は、大きく分けて 4 つに分けられます。正規課程にはもともとあった 6 段階コースと、8 段階コースがあります。6 段階コースには日本人や中国人学習者が多く、指導は母語と韓国語とで行なわれ、比較的語彙・構造が似ている人たち向けのコースです。8 段階コースは 2 年間のコースで、欧米などの学生向けです。これらの正規課程を終えた人たちのほとんどは、大学や大学院に進学するそうです。それ以外に夏期特別課程や 3 週間短

期課程がありますが、在外同胞などが夏休みを使って学びに来るコースです。特別教育課程は、留学生以外の働いている人、主婦などいろいろな学習者が持つ多様なニーズに合わせて設置された教育課程です。

実際に、語学堂の授業科目や時間割がどうなっているかについては、配布資料の 6 段階コースと 8 段階コースのクラスの科目及び時間割をご覧ください。その中の **Intensive** コースはテキスト中心に授業が行われていて、会話、読解、聴解、作文と 4 技能をバランスよく身につけられるようになっています。上級、つまり 6 段階コースの 5～6 級、8 段階コースでの 7～8 級は、作文と文章構成、歴史、政治史、新聞と、大学・大学院での授業内容に対応できるような時間割になっています。

目標については、各段階別の目標がありますが、6 段階コースの 6 級と 8 段階コースの 8 級、つまり最終的にコースを終えてどういう力を身につけるかという段階だけ、今回は紹介します。目標を見てみると、発音、文法の正確さを非常に重要視していることが見てとれます。また、研究発表ができるようになる、研究論文が書けるようになる、ディベートをする力を身につけるなど、大学で必要な韓国語を学ぶことに重点がおかれています。1～4 級の内容を見ると、演劇大会、のど自慢、観光地ツアーなど、実際に何かをして、韓国文化を理解するような力を伸ばすことも目標にあげられています。

成績評価については、初級～中級の段階では「話す」「聞く」の割合が少し高くなっていますが、上級になると等しく 4 技能を評価するようになっています。

次に語学堂の組織についてですが、一般的な業務をする教務課、学生のいろいろな心理面などに対応する学生課、教材開発や教育課程開発、教科研究などを担当する研究課、教師養成や教師研修をする研修課という 4 つの組織があります。今回は、学習項目作成に関してどういう研究をしているのかについて調べるために、研究課について詳しく話を聞きました。

研究課は韓国では延世大学校にのみあり、予算は年間 1 億 5,000 万～2 億ウォン(約 1,700 万～2,300 万円)です。研究課自体のスタッフは 40 人です。課で行なういくつかのプロジェクトがあり、40 人のスタッフがその中から参加したいものを選んで立候補し、担当のプロジェクトリーダーが、チームを構成してプロジェクトを進めていくとのことでした。実際のプロジェクトで現在あるのは、教育資料開発チーム、教育課程開発チーム、学習活動企画チーム、評価研究チームの 4 つです。具体的にそれぞれのチームの内容を紹介すると、教育資料開発チームは短期課程用のテキストの開発や CD、テープ、ワークブックなどの教材開発、『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク)の翻訳版のように、既存の教材のいろいろな言語の翻訳版を出す仕事も行なっています。教育課程開発チームは、すでにある正規コースや短期コースの問題点・改善点の検討、新しく設置するコースの検討を行なっています。学習活動企画チームは学習活動の研究、教師向けの教育に関するセミナーやワークショップの開催をしています。評価研究チームは、教師に対する授業評価及び教師の能力に関する研究、学生の能力評価に関する研究を担当しています。

具体的なプロジェクトがどのように行われているかについては、少ししか話を聞けませんが、教材開発を例に挙げると、ある教材を作るためには基礎調査を必ず 6 か月実施します。例えば、「韓国語テキスト開発のための基礎研究」というようなプロジェクトの場合には、ニーズ調査や実態調査などもきちんと行なっているという話でした。そうい

う調査を踏まえて教材作成を行なっています。基礎調査が充実していることが延世大学校の特徴だそうですが、残念なことに、語学堂で実施した基礎調査はすべて非公開だそうです。

最近 6 か月の調査を経て開発された教材『100 時間韓国語』1, 2, 5 の 3 冊を前に展示しました。従来 1 学期は 200 時間ぐらいのコースでしたが、在米の同胞やいろいろな人たちが短期で来るので、短期の学生向けの教材が必要となり、開発したそうです。対象とする学習者は韓国に対する背景知識があるので、一般の学習者とは少し区別しています。また、絵が豊富で、会話中心、アクティビティが豊富なのが特徴です。「1」、「2」、「5」というのは、従来の 1～6 段階に対応していて、今本がない部分はまだできておらず、今年中にはできるそうです。延世大学校は歴史も長いですが、歴史があるだけではなくて、充実したカリキュラムがあり、授業を行なうために研究や調査も行われていることが、お話を聞いて大変よくわかりました。

### (3) 韓国語教材から見る韓国語教育事情

延世大学校だけではなく、他の大学でどのように韓国語が教えられているか、今回は授業の見学は一切できなかったのですが、今の韓国語教育の状況を韓国語教材から少し見てみます。

ソウル市内の鐘閣にある「教保文庫」という大型書店に行くと、外国人向けの韓国語文法の教材、韓国語の一般的な教科書、韓国語能力試験の試験問題が売られています。今回は、延世大学校、梨花女子大学校、西江大学校の教材から今の韓国語教材の実態を少し見てみます。

延世大学校は文法中心の教育で有名だと言われています。実際に話を聞いてみると、文法だけでなく、コミュニケーション能力をはじめ、コミュニケーションを意識した活動も行なっています。梨花女子大学校は、コミュニケーションを重視した韓国語教育を行なっています。西江大学校は新しく、韓国語教育を始めてからの歴史が長くないのですが、日本人向けの韓国語留学インターネットサイトを見ると、「とにかく会話をしたければ西江に行け」と書いてあるほど、会話中心の教育を行なっていると言われています。

延世大学校（以下「延世」）、梨花女子大学校（以下「梨花」）、「西江大学校」（以下「西江」）の教科書が、それぞれどういう特徴があるか見てみます。配布資料の「教科書 3 種比較」をご覧ください。

この資料は、先ほど福永から話があった、国立国語院のイビョンギュ氏が調査した『韓国語教材分析研究』から引用したものです。この表で特に差があるのは教授法です。教授法が直接教科書に反映されていると思いますが、教授要目にも少し差があります。それから、「延世」の教科書は、2006 年に 26 刷も出ていますが、これはよく使われているからなのか、あるいは延世の学生が全員買うのでその数になっているのかもしれませんが。

この表から、3 種類の教科書の具体的な違いを見てみましょう。例えば「場所+います/あります<sup>2</sup>」の扱われ方を見てみます。課のタイトルは、それぞれ、「延世」：「勉強は面白いです」、「梨花」：「家」、「西江」：「銀行はどこにありますか」となっています。「梨花」と「西

<sup>2</sup> 韓国語には「いる」と「ある」の区別がなく、同じ語で表す。

江」は、どういう内容で進んでいくのかイメージしやすいような場所に関するタイトル、「延世」は、場所のことかわかりにくいタイトルです。「延世」は、対話本文→新出単語→文法の説明→文法練習という構成になっています。実物を見ると、これは日本語版ですが、日本語での文法説明があって、文型練習となります。練習は、代入練習と変換練習がありますが、答えがすでに書かれているので、練習というより、文を追っていくという感じです。

「延世」のワークブックには、文法と語彙の代入・変換練習、作文、会話があります。会話は、代入だけでなく、実際にワークシートを使ってやりとりをしながら練習するようになっています。

「梨花」の教科書は、絵がたくさんあります。どの課も最初は、絵を見て説明をするアクティビティで始まり、その後「ひとやすみ」という項目が必ずあります。「います・あります」の課は「昔の家」というコラムが韓国語で入っているなど、いろいろな内容があります。その後、タスクがあり、病室の場所を聞く、会う場所を決めるなど、いろいろな練習が実際にありそうな場面を想定して入れられています。最後は読解です。ワークブックは、「文法」、「語彙」、「function」があり、最後が同じように読解になっています。

「西江」の教科書ですが、「speaking」のところで会話があり、その後、活動「reading & speaking」、「listening & speaking」があり、「check list」で発音と語彙と表現が確認できるようになっています。文法もここで確認ができるようになっています。「cultural component」にはいろいろな内容がありますが、この課はソウルの歴史、文化名所に関する話が入っています。ワークブックは文法と語彙の代入や変換練習が多いですが、実際にその文型を使って、自分のことを話すところまで引きつけて練習する問題も入っています。

参考に、先ほど話があった、『移住女性のための韓国語』を見ると、課のタイトルが「机の上にあります」で、夫と妻の場面の会話→新出語彙→文法・練習となります。各課であまり差がなく、どれもこのパターンです。韓国語世界化財団が出している教科書『初級韓国語会話』は、執筆者が梨花女子大学の先生のため、「梨花」の教科書の影響をかなり受けていて、練習パターンや導入の形が似ています。

他の教科書に関しては、このような見方をすると、どれも似ている印象を受けました。韓国語教科書の特徴を大枠でまとめてみると、新しいものは絵や図が豊富です。「延世」の教科書は全く絵がなく、文字ばかりの教科書です。新しいものは、見た目も楽しく読めるように絵が入っています。また、文法説明だけではなく、さまざまな練習やアクティビティが入っています。今までの話で「延世」の教科書はつまらないという印象を与えてしまうかもしれませんが、「延世」は、定着を図るために、ワークブックにいろいろな練習・活動を入れています。

価格は、だいたい 2 万ウォン（約 2,500 円）以上です。比較のために、韓国の食事の価格をご紹介しますと、ビビンバがソウルで 7,000 ウォン～8,000 ウォン、地方で 4,000 ウォンくらいです。大学の教科書などには CD も必ずついています。それでも食事の値段と比べると 2 万ウォンはかなり高いです。しかし、労働者向けは 5,000 ウォンくらいで、労働者も手軽に購入できます。

#### (4) 第二言語としての韓国語 (KSL) 研究

最後に、第二言語としての韓国語 (KSL) 研究が韓国でどのように行なわれているかに

ついて、全体像を聞くことはできませんでしたが、少しだけ触れます。

学会は、「国際韓国語教育学会」と「二重言語学会」(バイリンガル教育がターゲット)の2つが大きな学会としてあります。延世大学校で聞いた話では、この10年で学会の会員数が急激に増えているとのことでした。両方の学術大会で、韓国に住む外国人向けの韓国語教育を扱った内容が増えています。その他には「韓国社会言語学会」という学会もあります。

学会の紀要はホームページ上でも見られますが、そこを見ると日本語教育でも扱われている内容に似たものが多いです。延世大学校語学堂が出している紀要の、2004年12月に発刊されたものの目次を配布資料に載せてあります。また、梨花女子大学校のイヘヨン氏を中心として、梨花女子大学校の大学院生が『韓国語学習者の中間言語研究』という本を出しています。日本と似ている部分もありますが、活発に研究が行われている状況が、いろいろな学会のホームページ等から見てとれました。

以上